

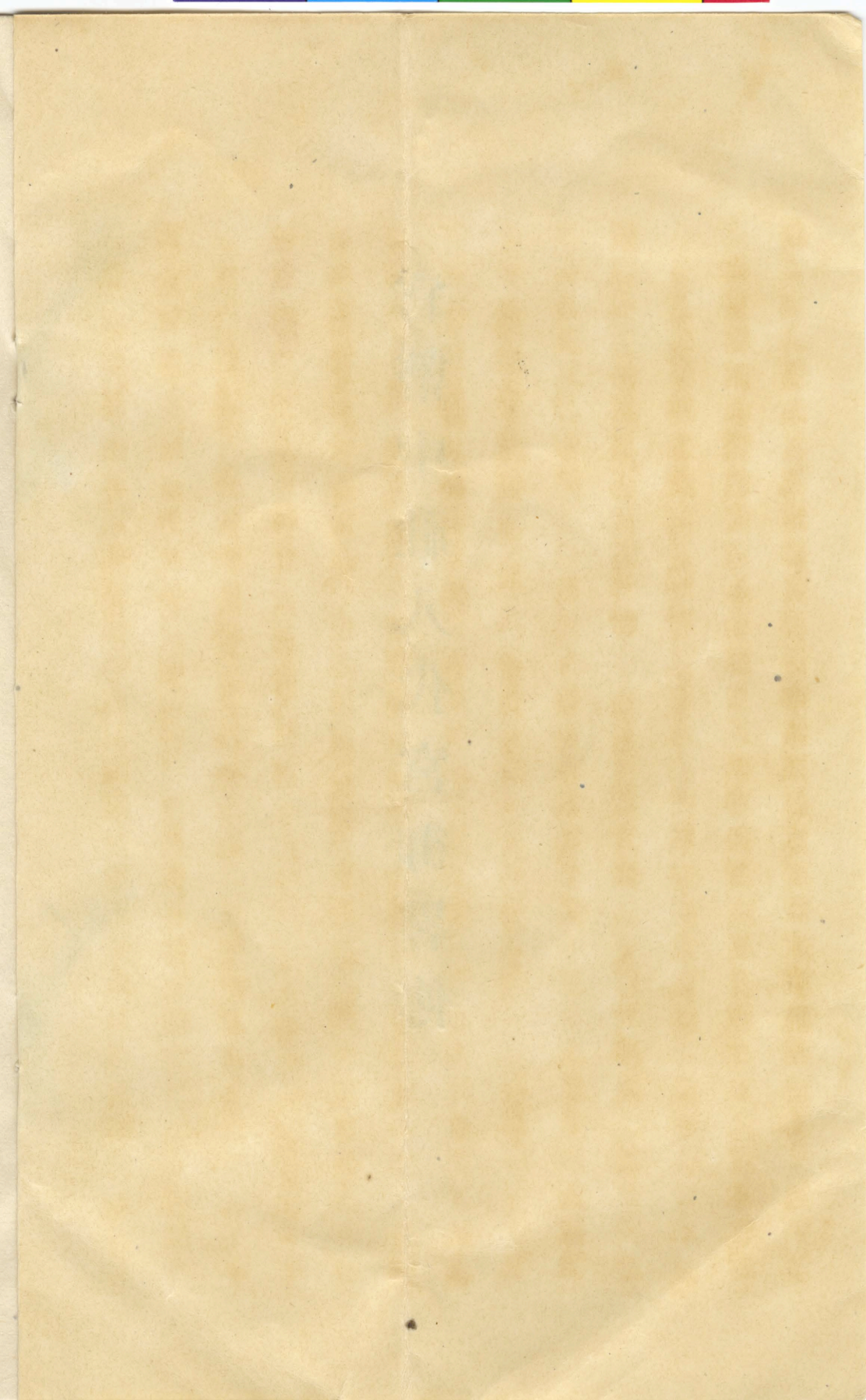
Yatsushiro no miya Higo pro.

"Brief biographies of the
deities enshrined."

官幣中社八代宮御畧傳

寄贈





八代宮御畧傳

官幣中社 八代宮 御祭神 貳柱

懷良親王 後醍醐天皇第九皇子

良成親王 後村上天皇第七皇子

列格明治十三年八月三日達明治十七年鎮坐

例祭 八月三日 小祭 四月二十日

境内總坪數

壹萬四千五百五拾九坪九合

内

七千六百參拾五坪 敷地番号貳拾八番地

六千九百貳拾四坪九合 蓮遑

八代宮は熊本縣廳に至る十貳里八代停車場より拾八町にして八代城趾にあり蓋し八代城は元和六年加藤忠廣の臣加藤正方をして築かし

むる處にして加藤氏没落の後細川氏の有となり忠興先つ入りて爰に在り正保三年四月光尙幕命を奉して其臣長岡興長をして此所を守らしむ茲に子孫在城する貳百五十余年明治三年六月城を退き七月本城守衛の任解四年七月八代縣を置くや八代舊城を以て縣廳に當つ同六年一月八代縣を廢し白川縣に併せらる其後同十三年八月征西大將軍宮懷良親王を奉祭して官幣中社に列し八代宮と稱す地勢平坦にして舊城臺に登臨すれば東南は連峯壘嶂晴靄模糊として山髻を沒し西北は滿々たる不知火海にて野坂浦水島の名勝指顧の中に望み忽ち長田王の御詠を思しめ天草の諸山眼前に横はり山陽外史の萬里舟泊の作を水天髣髴たらしむ實に風光絶佳なり謹て兩親王の御履歷を考へ奉るに政權武門に移りて朝廷の稜威全く衰へ天下將軍ある知て天子あるを知らず此時に當りて後醍醐帝英明の資を以て帝位に即き四海に号令し千山を踏み萬壑を越ぬ或は幽囚に陷玉ひ或は遠島に流され萬

乗の御身を以て人生の窮阨を極め而かも屈撓し玉はす遂に夕陽を既に落たるに回し偉業を建玉へりかゝる時代に於てかゝる英主の下人傑の輩出するは天の數なり故に諸皇子はいふも更也其臣下に至る迄皆英雄の資を備へたり正成義貞長年高德武重親房藤房に視よ其智と勇とを万世に亘りて耻なき者なり懷良親王は實に此の如き時代に生れ玉へり之を御兄にして尊良宗良護良の英才あり之を御弟にして義良玄圓滿良の仁德あり親王獨り不明ならんと欲すも亦得へからざるなり親王は後醍醐帝弟九の皇子なり母は冷泉爲道の女當時兵馬倥傯京師屢々兵災に罹り上皇室より下庶民に至る迄所謂草を敷寢の旅枕平沙萬里征戰已む時なく文墨の事亦問ふに違あらざるか故に御出生の年月詳ならず

或云元徳の頃
御降誕と

柳々宮は延元元年征西將軍の大任を拜給ひ九月僅に六七歳の御幼稚にて父帝と別れ玉ひ僅少なる從者と共に叡山を御發駕ありて賊軍の中を通過し玉ひ四國へ渡り十二月讃岐へ

到り同二年伊豫の忽那島へ移り三ヶ年御滯留諸九州東南方へ廻り玉
ひ興國三年薩州津に着岸ありさて正平二年冬薩摩を發し同三年肥後
に着せられてさて菊池に到着し玉ふまで十三ヶ年を費したり其間難
關苦楚如何はかりにわはしまし、か深夜人知れぬ御夢は幾度か京都
の空に通ひけんぞ推志奉るなり然るに興國の始父帝崩御ありては益
々征衣の袖を絞らせ玉ひつらめと宮の渡り給ふ所いつ方も賊徒充塞
し之を御征服のために自ら御心を奮起せしめ給ひ菊池に御着の後は
誠忠なる武光の補翼を得て漸次征西府の威勢擴張せられ正平の末ま
て鎮西を一統せられ御心と自ら慰め給ふところあり後村上天皇興國
二年更に九州の事を親王に委任し給ふ同三年五月八日阿蘇惟時惠良
惟澄に薩摩官軍の後援をなさしめ給ふ六月二十七日伊集院忠國親王
の軍に詣る七月二十二日島津貞久薩摩千台に討たんため惟時に和泉
山門水俣等を攻撃せしめ給ふ同四年十一月八日惟澄の南郡の軍を功

褒し且日向を襲はしめ給ふ同五年閏二月二十一日頼元惟澄に肥後人
御に於ける行賞を約す同六年二月十八日惟澄に矢部山を安堵せしめ
給ふ八月五日惟時皈順すへきを諭し給ふ正平元年六月二十四日南朝
惟澄をして親王の九州平定に力を效ちしむ同二年正月二十八日薩摩
戦急にして肥後援助の難きを惟澄に報し給ふ九月二十七日南朝亦惟
澄をして近幾開戦の時に方り特に親王に力を效さしむ十一月二十七
日惟澄に肥後入御を報せしめ給ふ十二月十四日肥後入御の御途上よ
り五條良氏をして惟澄を召さしめ給ふ正平三年正月二日肥後國宇土
津に着御あり惟時を召し給ふ正月十四日宇土を發し御船に次し遂に
菊池に入御あり二月二十三日頼元惟澄を促して筑後發向の軍に會せ
しむ四日法華經普門品を寫して筑後高良山玉垂宮に納給ふ六月十二
日肥後吾平山に宿禱し給ふ六月二十日吾平山より菊池に還御あり九
月二十六日筑後御征伐のため菊池武光を肥後南郡に遣はして兵を催

さしめ惟澄の兵を召し給ふ同四年四月十一日足利直冬を長門探題と
す此日京都を發す八月十六日後醍醐帝崩御九月足利直冬肥後川尻に
着す十一月一日惟澄及其弟惟雄か合志原に戦ひたる功を褒し給ふ同
五年十月十六日直冬兵を擧ぐ少貳大友之に属す十月惟時坂順同六年
八月八日親王の軍直冬の將と肥後白木原に戦ふ九月二十九日親王の
軍直冬の將と詫摩原に戦ふ十月一日頼元武光等を率ひて菊池を出て
給ひ是日惠良惟雄等をして關城を陥れしめ尋て筑後瀬高に御在陣
時に大友氏時兵數万を率ひ虚を伺ひて肥後を畧せむとす故に御軍を
かへし大友を退散せしめ給ふ同七年八代郡に護國山顯孝禪寺を建立
し給ひて御考妣の御陵墓を移し且御靈牌を奉祝し給ふ

今宮地谷村に舊
跡を存す土俗此

地を悉知院と云征西王の小袖塚とて二つの塚有は彼御陵墓ならむ將今存する所
の御考妣の御靈牌はそのかみ顯孝寺にありし御物なるへし今は悟眞寺にあり

此時高

田の御所に坐まして管内の事務を聽斷し給へり閏二月二十日南期九
州の官軍に來援を求む同八年二月武光一色氏を筑前針摺原に破る七

月九日武光肥前菩提寺城を陥れ尋て頼尙惟時と兵を合せて筑前飯
盛山城を攻む同九年八月廿四日菊池武澄肥前湯山村より進んで多比
良城を攻めやかて之を抜く十月武光一色五郎等を筑前千手城に攻逃
くるを追て豊前弓削田に至る同十年八月十八日肥前征伐のため菊池
を出てやかて國府に入り給ふ九月一日武澄をして小城を攻めしめ給
ふ十月二十五日は頃御陣を豊後國府に移し給ひそれより同國大神宇
佐城并筑前植木を経て博多に入御あり範氏直氏等遂に九州より長門
に逃る同十一年十一月二十五日三條泰季氏久等を率ひて大隅加治木
若屋城を陥る同十二年七月二日武光をして行實の領せる筑前桑原莊
の違乱を停めしめ給ふ同十三年名和長年の嫡孫村上顯長從子顯興長
年の弟信濃法眼源盛等一族三百余名八代城今古麓村に舊趾ありに在て征西府を
守護す同年春尊氏か探題一色直氏を筑後國に征し給ふ宮方大に勝て
兵威全道に震ふ依て鎮西の諸豪たふく服順すといへども猶大友少貳

等は内心服せず同十四年八月六日少貳頼尙を筑後川に征し給ふ此前
後御合戦の最烈しき者なりとす菊池武政千餘騎に將として旗を進め
て頼尙の嫡子直資を撃弟二軍なる菊池武信千餘騎を以て少貳頼泰に
戦を排み親王は第三軍に將として菊池武光新田氏の一族等を率ひて
進み給ひ御自ら陣頭に立ち勇戦奮闘直に敵の中堅を衡かせられたり
頼尙の軍之を見て全力をこゝに傾注し親王の軍を嚴しく攻撃し奉れ
り爲に親王は御痛はしや御身に三創を被らせ給ひなほ屈せず敵陣に
突入せられんとせしかは日野坊城洞院花山院等の公郷等之を止め親
王を落し奉らんとして遂に奮戦して死したり亦新田氏の一族は敵の
側面より攻撃を始めしか世良田岩松田中等の諸將亦之に斃れたり是
に於て武光武政等は安き心もなく何の爲に惜む命ならん平生の約に
違はず我に伴ふ兵とも悉く討死せよと將士を勵まして陣頭に立ち死
力を盡して敵に當りまつ親王をして危難を免れしめそれよりますよ

す衆を督し死を鴻毛の輕きに比し自ら先頭に立ちて敵に肉薄し雨の如く降り來る矢をも物ごもせず馬斃るれば敵の馬を奪うて騎り甲落つれば甲を拾うて着接戰數十合卯刻より酉刻に及ひ激戰數合兩軍死する者算を亂し伏屍野を蔽ふやかて少貳軍敵せず遂に敗れ賴尙は遁れて寶滿山に引上げたり菊池氏勝利を得たれども死傷甚た多く爲に賴尙を追撃すること能はず再戰を期して一旦肥後國へ還れり同十五年六月廿九日菊池肥前又次郎等賴尙の部將宗經茂と肥前橫大路松崎等の諸城に戰ふ同十六年七月十七日武光等を率ひて筑前長島山に出御あり賴國等油山に退く八月七日武光をして氏時冬資を青柳に討たしめ尋て博多に入御あらせらる此歲頃良成親王御降誕同十七年七月一日高良山に御參詣あり自空に令旨を賜ふ同十八年九月九日賴元に筑前三奈木莊及び日向飢肥地頭職を賜ふ惟澄に豊後入田小川の戰功を褒し給ふ同十九年十月十五日惟武をして父惟澄の遺領を襲かしめ

給ふ同二十年四月十九日太宰府に陣し給ふ四月廿一日筑後高良山に
詣せらる同廿一年此年良成親王九州に着し給ふ同廿二年十二月廿七
日管生大炊助か多年の軍功を褒し給ふ同廿三年三月十一日村上天皇
崩御長慶天皇踐祚同廿四年十二月十三日良成親王將に四國を征し給
はんごす是日阿蘇神社に祈禱を命し給ふ是歲明主朱之璋揚載を遣は
し親王に謁して倭寇を禁せん事を請ふ建徳元年三月明使綽秩來り親
王に謁す親王之を斬らんごし給ふ同二年二月廿日親王御歌あり

日にそへて のかれんごのみおもふみわ いご、うき世のこごしけきかな

しるやいかに世を 秋風の吹からに 露もごまらぬわか心かな

東國に坐す御兄宗良親王へ贈賜り給ひし御述懷にして同十二月到來
して後の便宜にかくそ申つかはし侍し

ごにかくに 道あるきみかみよならは こごしけくごも何かまごはん

草も木も なひくごそきく大方の 世を秋風ごなけかさらなん

此御贈答新葉集雜下に出たり文中元年八月十二日太宰府陷り武光と
共に逃れ給ふ同二年長慶天皇御讓位後龜山天皇踐祚同三年九月十七
日筑後高良山の御陣支へ難く菊池賀々丸親王を奉して肥後に還る是
より先菊池の御在所にては懷良親王多年の御辛酸により一時九州を
風靡せられしに拘らす了俊の侵入と共に太宰府高良山交陥落し今は
再ひ菊池に退去せらるゝの己むなきに至りたれば御鬱悶の情に耐へ
難く帳恨御胸に充たせ給ひしならむ殊に當初の御目的たる東上の御
計畫も全く破壊し去り快々として樂み給はさりし際なれば御憂愁更
に深く滿腔の御悲憤は寧ろ親王をして世を退かんとする御念を起さ
しめ奉りしか如し彼の了俊か水島の陣に迫りし時は一しほ親王の御
決心を固めしめ奉りしか如く天授元年五月親王か阿蘇社に詣り小國
に赴かせられしはやかて是等の御祈にもありしなるへし時に良成親
王も四國より還らせられ河野通直には土佐經營の新事業あるを以て

新に圓明寺六納言を下され親王は征西將軍の御職を良成親王に譲り
てこゝに御隱退の御身とならせられたるか如しされは文中四年天授元年
六月十三日阿蘇惟武に日向國々司職を興へ豊後日田莊地頭職を安堵
せしめ給ひし令旨以後特別の場合の外親王の御命令出てす天授二年
夏良成親王武興賀々丸の改名を率ひ肥前國府に陣し給ふ同三年筑後矢部に
入御あり了俊來りて之を攻め奉らんとす同四年九月廿九日大友少貳
大内兄弟等數千騎肥後國に至り軍を會す武朝之を聞き良成親王を奉
し一族及び葉室親善以下の兵を督してこの大軍を詫摩原に迎へ遂に
大合戦となり賀々丸當時僅に十六歳の壯年なり味方は兵寡きにこの
中國九州の重なる大勢に抗して戦ふとなれば唯天運に任せて奮闘し
必死の勇を振ひしか衆寡敵し難く一族以下銳卒數十人忽にして戦死
し賀々丸も傷を被り官方勢まさに潰散せんとする危急に瀕せり良成
親王は御齡未だ二十歳に満たせ給はざる御壯年にて血氣盛なる頃な

れはこの状態を見ていかて躊躇し給はむ自ら兵を指揮し了俊の陣に向ひて突撃奮闘し給ひしかは味方爲に勢を恢復し敵兵敗れて退散せり賀々丸の奮戦はもとよりその所ならんも親王か金枝玉葉の御身を以て親しく陣頭に出て雲霞の如き敵の大軍を衝き味方の士氣を挽回し遂に敵軍を退け給ひし御勇氣は實に嘆美に餘りあり彼の懷良親王が大保原の戦に自ら線戦に出て御身に三創を負ひ給ひしを併せて感奮すべき事實といふへし弘和元年日本使節明に至る返書親王の許に達す親王返書を遣し給ふ同二年八月廿四日後龜山天皇勅書良成親王に賜ふ同三年癸亥三月廿七日懷良親王八代高田の御所に於て薨去なし給ふ（藤田文學士著征西將軍宮に）（同郡麓山中宮谷にをさめ奉る）（は筑後矢部に薨去とあり）（維新以後御墓掌をわかる）元中元年十一月廿一日良成親王豊前今任莊阿蘇社に寄進し給ふ同二年二月十日良成親王禰寢久清の皈依を褒め給ふ同三年十一月廿七日良成親王惟政に豊後日田郷を安堵せしめ給ふ同四年十一月十七日良成親王肥後

宇土にあり由利信濃守を御使として御劔を五條賴治に賜ふ同五年十月十三日良成親王相良前賴が日向三俣院に於ける戦功を褒し給ふ同七年秋宇土川尻陷り良成親王武朝と共に八代に逃れ給ふ同八年九月八代陷り良成親王筑後矢部に入り給ふ同九年十月廿五日南北朝合一明徳四年二月九日惟政をして九州の宮方再興を謀らしめ給ふ應永元年十二月十九日良成親王五條良量に筑前下津郡阿蘇一族の舊領を給ふ同二年十月二十日良成親王賴治の軍功を褒し給ふ此年間に良成親王薨去し給へりされば御墓も大柚の山中にあり

土人今稱して御側といふ
維新後御墓掌をわかる

按するに前將軍宮初御下向の延元元年より弘和二年に至る迄軍國の多事なる或時は筑後高良山或時は筑前博多の津に御鎧の袖をかたしき給ひ御心つくしの御在陣四十又は八年の久しきをふるも御理運の時いたらざるをいかにせん後征西將軍宮も故宮の御代官として天授文中の間御積勞少からす武朝申狀にいはゆる被受正平勅裁爲故大王

御代官年來被積勞功云々なごみへて最も尊く殊に詫摩原の合戦には
親ら敵に當り粉骨凶徒を追退け専ら恢復を謀り給ひ北朝と御講和の
後に至りても南朝の正朔を奉し文中の年号を忘れ給はす肥筑の間に
割據特立し給ふ事の雄々しく其忠憤を相像し奉れは慷慨の涙に耐す
時ありてや明治の御光と共に兩宮の御功勞顯れそめ明治十三年八月
三日官幣中社に被列八代宮と齋祭らせ給へるは最も畏く千載の後た
れか其御稜威の尊を仰き奉らさらん故今上陛下御即位の大禮大嘗祭
の記念として茲に御畧傳を編輯するここにしかり

大正四年十一月

木庭保久謹識

八代宮社務所

